

■ 論 文 ■

セクシュアリティの多様性と変容
ー大阪界隈のレズビアン・バーの調査からー

小田二 元子

(関西学院大学大学院社会学研究科博士課程前期課程)

■ 要 旨 ■ 本研究の目的は、レズビアンという存在をセクシュアリティという視点から再検討することにある。これまでの研究において、レズビアンは男／女、異性愛者／同性愛者という、カテゴリーにおいて、女、同性愛者という、二項対立のなかにある権力関係の劣位に置かれることによって社会的に不可視な存在であるとして位置づけられてきた。それ故、レズビアンに関する研究は現在に至るまで、レズビアン・フェミニストや、フェミニズム運動、カミングアウトといった、「レズビアン不可視性」と、その「不可視性」の打開に焦点を当てた議論が中心となってきた。では、その「不可視」な存在として位置づけられてきた「レズビアン」は、如何にして「レズビアン」であること”を実践しているのだろうか。本研究では、レズビアン・バーにおいて如何にしてその空間の成員が「レズビアン」である”ことを実践しているのかに焦点を置き、「レズビアン」としての多様で可変的な性の在り方を明らかにしていく。

■ キーワード ■ セクシュアリティ、自己規定、レズビアン

1. はじめに

本稿における議論の足がかりとして、実際に私がレズビアン・バーにおいて体験した出来事を紹介したい。それは、ある夜に私がレズビアン・バーを訪れていた際に起こった。私を含め4、5人の客と店のスタッフが歓談していた時のことであった。おもむろに店の扉が開き、40代と見える男性が店の中を覗き込んでいた。それを見た店のスタッフが急いで扉を閉めようとしたにもかかわらず、その男性が扉の間に体をねじ込み、店の中に入ろうとしたのであった。それを目の当たりにした客たちは皆、口々に、「こわい」と言った。私は、この「こわい」という言葉が、単に彼女たちが「男性」に抱いた恐怖心とは別のものであると感じた。それは、レズビアン・バーという、社会に対し一定の閉鎖性を有する空間が、その外部からこじ開けられること、脅かされることへの恐怖だったのではないだろうか。

レズビアン・バーとその外部の空間とを分け隔てるものとして「扉」があるが、その「扉」とは

1) 本稿の3-2. において記述するレズビアン・バー「B」

どのような意味をもつのだろうか。レズビアン・バーの「扉」は単なる扉ではなく、先述したエピソードから浮かび上がってくる「扉」には、外部の世界から厳格にその空間内部の世界を分ける象徴的な意味があると言える。

「性」を語り、表現することは「タブー（禁忌）」の対象であった。なぜ、性はタブーなのかについて明らかにしようとしたのがフロイトである。性的衝動（倒錯）は多様であり、これを「文明」が抑圧することによって社会秩序が維持されるというのが、フロイトの理論である。フロイトが指摘したように、そもそも性的欲望は多様なので、その欲望が向かう対象も多様である（フロイト、2007）。ただし、そのなかでも社会的な抑圧の度合いが著しいタイプの性的欲望が多々存在する。同性愛もそのひとつである。また、同性愛のなかでも生物学的性が女性同士である場合の方が、抑圧の度合いが高い。抑圧の度合いが著しい女性同性愛者である「レズビアン」が、どのように抑圧を「かいぐり」、「レズビアン」である”ことを実践しているのかについて、レズビアン・バーという場所とそこでの関係のありかたを通じて考察する。

2. 先行研究

本稿における議論に入る前に、研究領域において「レズビアン」という存在がどのように定義されてきたか、どのような存在として捉えられてきたのか、を述べていく。「ホモセクシュアル、ヘテロセクシュアル、レズビアンやゲイという言葉や諸概念は西欧の歴史に登場してからまだ日は浅く」（ハート、2002）、とりわけ、「レズビアン」に関しては、ヘテロセクシャルや、同じセクシャルマイノリティである男性同性愛者と比較しても社会的認知の度合いが低いのではないかと考えられる。そのことを堀江は「レズビアンの不可視性」という概念を用い、次のように説明している。「レズビアン」という語は、「女」であり「同性愛者」であるという二つの属性をあわせもつ言葉であり、そこには、①女／男という性的差異を機軸として措定されるジェンダー軸と、②同性愛／異性愛という〈性的指向（sexual orientation）〉を機軸として措定されるセクシュアリティ軸という2つの軸がある。しかし、「レズビアン」は、「同性愛者／異性愛者」「男／女」という枠組みの中で、それぞれにプライオリティが低い位置に置かれることで社会的に不可視な存在となっている（堀江、2004）のだ。

このように、「レズビアン」は不可視性を有する存在として捉えられてきた。アメリカにおいては、年代を遡ってレズビアン・バーを中心につくり上げられた文化やアイデンティティに関してまとめられた資料があり、そこでは、1950年代から1960年代のアメリカにおいて、若年・労働者階級のレズビアンと中産階級の中年レズビアンとの間の対立構造が明らかになっている。（フェダマン、1996）しかし、日本におけるレズビアン・バーに関する研究はまだあまり進んでおらず、研究資料も豊富であるとは言い難い。そこで、本稿では、レズビアン・バーを単なる消費の空間ではなく、セクシュアリティを社会的に「公開」することから距離を置いた「レズビアン」たちが親密性を確保するための空間として捉え、これまでほとんど焦点化されてこなかった“カミングアウト”から距離を置く「レズビアン」が、どのようにセクシュアリティを実践しているのかを明らかにしていきたい。

現在の大阪界限における実地調査の分析に入る前に、レズビアン・バー「B」におけるインタビューから明らかになった大阪界限のレズビアン・バーをとりまく変遷に関して述べていく。1960年代は、未だ、大阪にレズビアン・バーが出現しておらず、サークル活動という場において恋人紹介、お見合いといった恋愛実践が行われていた²⁾。また、1960年代は「レズビアン」であることに罪悪感を覚える人が多かった為、恋人紹介、お見合いという活動に加え、人生相談も重要な活動となっていたという。

お初天神: 老舗レズビアンバー
北新地: おなべバー

2) そうした文脈から、ここでは、サークル活動をレズビアン・バーの前身として措定したいと思う。

1990年代までに、ゲイ・バーが堂山に集中したのに合わせ、続々とレズビアン・バーも堂山に集まり始めた。しかし、ここに至っても、レズビアン・バーの料金システムが時間制であったり、高価であったため、多くのレズビアンにとっては敷居の高い空間であった。

4. 大阪界隈の二軒のレズビアン・バーにおける調査

次にレズビアン・バー「A」、「B」それぞれの調査において明らかとなった、両者の空間的な特徴と、そこで見られる相互行為に関して述べていく。

4-1. レズビアン・バー「A」

レズビアン・バー「A」は、繁華街の中心地近くに立地しており、店はスナックやパブが軒を連ねる雑居ビルの一角にある。隣接するスナック等と同様に、店の外からは店内の様子は分からない。店内はカウンター席がメインで、10人程が座れるようになっている。また、訪れる客の年齢層は20代から30代前半が中心であった。レズビアン・バー「A」において、その空間に参加する際、既に空間に参加している側からの特殊な造語・略語を用いた問いかけが行われていた。ここでは、主に、初めて訪れる客に対し、その人が、「レズビアン」であるかどうかを判断する基準として特殊な造語・略語を使うことができるのかの確認が行われる。そして、その問いかけに、適切に答えることができる者が、レズビアン・バーという空間に参加することが可能となる。そのような問いかけ、それに対する応答を通じて、レズビアン・バーという空間の内部と外部との境界が構築されている。

また、レズビアン・バー「A」という空間におけるコミュニケーションには、匿名性という特徴が挙げられる。レズビアン・バー「A」においては、それぞれ、空間に参加している人々は、本名を秘匿し、代わりに、その空間では“源氏名”と呼ばれる、仇名を用い、互を呼称している。また、本名同様、社会的な地位、職業もまた、秘匿される。そうすることで、「レズビアン」であることが社会的に露呈する不安やリスクを軽減していると考えられる。

共同社会形成が、一定の内容が秘密であり続けるのを保証するのに役立ち…また、秘密を知っている者たちが、たがいに秘密保持を保証し合うために結社を形成し、結社化は諸個人のそれぞれに心理学的なある支えを提供して、漏洩の誘惑から彼らを保護する。(ジンメル, 197: 87)

このジンメルの記述からレズビアン・バーに関して考察を進めていく。まず、レズビアン・バーという空間における「秘密」とは、空間の成員が「レズビアン」である」という、まさにそのことである。セクシュアル・マイノリティの研究領域において、「カミングアウト」は、「自身の性的指向の開示」(イーディー, 2006: 66)を意味する言葉としてしばしば用いられている。自身が「レズビアン」である」と公言することは、現在の日本社会において社会的に不利な立場に立たされるリスクを伴っている。なぜなら、「同性愛者というレッテルは、同性愛という性的指向が人間

性や人格、また生物学的な特徴といったほかの要素に結びつけられてイメージされてしまい、それゆえに、同性愛者は、仕事や友人関係といった、恋愛や性的指向とは関係のない要素に至るまで、逸脱者としてのレッテルを貼られてしまう」(伏見, 1997: 74) からである。

したがって、そういったリスクを回避するために「レズビアン」である”ことを「秘密」とし、レズビアン・バーという空間を構成する成員は、「レズビアン」である”という、「秘密」の共有がもたらす信頼によって裏打ちされた連帯を形成していると考えられる。

ここにおいて、レズビアン・バーという場が、「秘密結社」的な空間であるといえる。ジンメルは「秘密結社」という概念に関して次のように述べている。

秘密が境界のように秘密結社を取り囲んでおり、秘密結社はそのより広範な圏の内部において、それじたいはより狭小な圏としてこの広範な圏と対立している。秘密結社の目的が何であるにせよ、この対立はつねに隔離の意味において考えられる。秘密結社は、明らかにその総体からの一時的な分離を、その目的のために不可欠な技術と考えるのである。(ジンメル, 1979: 98)

「秘密」の共有によって形成されたレズビアン・バーにおける連帯は、「レズビアン」を逸脱者として捉える社会という広範な圏の内部において、その「秘密」を境界として外部とは隔離された空間をつくりだした。そうした、秘密結社的な性格を持つ空間内部では、形成した境界の外、つまり、空間外部からの視線を意識することはない。従って、空間に参加できる人／できない人との間に境界が作られ、その空間内部においては「レズビアン」として、自由に振舞うことが可能となる。

また、レズビアン・バー「A」では、コミュニケーションの初段階、自己紹介の場において“セク”、“セクシュアリティ”と呼ばれる情報を相互的に交換する³⁾。この“セク”、“セクシュアリティ”と呼ばれている言葉は、主に「レズビアン」同士の関係において、特に恋愛関係を築く際に使われる用語であり、恋愛関係を前提とし、自身の恋愛の性質や、指向を呈示する言葉であるとされている。“セク”という言葉は、“ボーイ”、“フェム”、“中性”といった言葉で示される外見的特徴と、“タチ”、“ネコ”、“リバ”、といった言葉によって示される性役割という情報を併せ持っている。すなわち“セク”は、その外見的特徴を示すカテゴリーと性役割を示すカテゴリーの組み合わせによって構成されている。

レズビアン・バー「A」では、この“セク”によるマッチングを前提に、恋愛関係を構築している。このような、セクによるマッチングを前提とした恋愛関係において、恋愛関係が成立すると指定される組み合わせと、逆に恋愛関係が成立しないとされる組み合わせがある。したがって、自己紹介などコミュニケーションにおける早い段階で互いに自身のセクシュアリティの情報である“セク”を呈示し合うことにより、恋愛関係が成立するかどうかを互いに確認し合うのだ。すなわち、この“セク”によるマッチングは、効率よく恋愛関係を形成する手段であると言える。

3) 実際にレズビアン・バー「A」では、同席する客や店員から度々「“セク”は何。」と問われる。

	ボイタチ	ボイリバ	ボイネコ	中性タチ	中性リバ	中性ネコ	フェムタチ	フェムリバ	フェムネコ
ボイタチ	×	○	○	×	○	○	×	○	○
ボイリバ	—	○	○	○	○	○	○	○	○
ボイネコ	—	—	×	○	○	×	○	○	×
中性タチ	—	—	—	×	○	○	×	○	○
中性リバ	—	—	—	—	○	○	○	○	○
中性ネコ	—	—	—	—	—	×	○	○	×
フェムタチ	—	—	—	—	—	—	×	○	○
フェムリバ	—	—	—	—	—	—	—	○	○
フェムネコ	—	—	—	—	—	—	—	—	×

図2

私たちは他者を「絶対的に」は知ることはできない。「絶対的に」というのは、彼（女）の総和的な全体のことであり、私たちは他者に対する断片的な知識から「彼（女）に対する個人的な統一性」を作り上げている。従って私たちは一般的な類型によって、彼（女）の像を獲得するのである。（菅野，2003：134）

レズビアン・バー「A」では、“セク”というその空間における「一般的な類型」を土台に相互行為が成り立っている。また、この“セク”という概念は、相互行為における相手との間の関係において「役割」として機能する。「役割」とは、「類型化された期待に対する類型化された反応」（バーガー，1979：140）であり、この意味において、自身が相手に対して呈示した“セク”の内容は、まさに相手から自分に向けられる「類型化された期待」（バーガー，1979：140）である。ここにおいて、相手の期待に応える為に、その役割を演じることが求められ、たがいが相手からの「役割期待」に沿うように振る舞うことによって、相互行為が成立している。

以上のようなことから、次のようなことが示される。レズビアン・バー「A」において、自身のセクシュアリティを規定し、相手に呈示する“セク”などの隠語が、相手との相互行為における「役割」という機能を備えており、また、その「役割」は、自己呈示だけではなく、相手からも期待される「役割」であるということである。

また、そのように、恋愛関係を形成するにあたり、相手からの役割期待に応える為に、自身の呈示した「役割を演じる」ことが求められる。このような、レズビアン・バー「A」で見られた恋愛実践は、「役割演技」という特徴を備えていると考えられる。すなわち、レズビアン・バー「A」という空間において、その成員は、空間外部にある日常生活における「役割」を離れ、その限られた空間の中において「レズビアン」としての「役割」を演じているのである。

さらに、職業や社会的な地位もそれを明らかにするか否かの決定は個人に一任されている。名前や職業、住所や生まれなど、本来社会生活において、自身や他者を認識する為の重要な項目である

はずのこれらの社会的な属性に関する情報は、「役割期待」に応える「演技」の成功を妨げるようであれば、それを秘匿し、その「演技」を成功に導くために有効な手段とさえなり得るであろう。ゴフマンは彼の著書である『行為と演技』において演技と秘密との関係に関して次のように言及している。

ある種のパフォーマンスとかある種の役目ないしはルーティーンには、それを遂行するパフォーマーがかくさなければならないものは何もないが、それでも活動の始めから終わりまでのどこかで、彼が公然と取り扱えないようなことがでてくるのである。当該の役割ないしは関係のありようの範囲内に入る事柄とか分担される行為の数が多ければ多いほど、秘密の点が存在する確率がより大きくなると思われる。…戦略的位置を占める秘密の場合、〔互いの秘密にはふれないという〕黙約の含意するところを真正直に生活の全領域にまでおしひろげなければ、両者の関係の望ましい現状を維持することは可能なのである。…いくつかの事実を強調し、他の事実をかくすことによって理想的な印象が与えられる。(ゴフマン, 1974: 75)

つまり、レズビアン・バー「A」という外部から隔絶された空間において、その空間に限定された「役割」を演じる際、その「役割」と距離があるような、自身の空間外部における情報は積極的に秘匿される。というのも、レズビアン・バー「A」という空間において、空間外部における自身の「役割」がオーディエンスから期待されないものと判断するとき、その空間内部における「役割演技」の妨げとならないために、空間外部の「役割」に関する情報は秘密、時には嘘という手段によって役の後ろに追いやられるのだ。レズビアン・バーにおいて、こういった秘匿という手段は、自身が演じ、また相手から期待されているその「役割」を維持する機能を持つと言える。したがって、レズビアン・バーという空間において、秘匿はその動機によって倦厭されることなく、その空間におけるオーディエンスの期待の下に、むしろ暗黙のうちに正当化されているのだ。

また、レズビアン・バー「A」における相互行為で見られた“セク”による「役割演技」は、必ずしも、既成の男女関係、「支配－依存」の権力関係をモデルとして演じられているわけではない。レズビアン・バーという空間における相互行為において、“男らしさ”、“女らしさ”という印象を「役割演技」として実践しているのである。すなわち、レズビアン・バー「A」における相互行為においては、その「役割演技」として、必ずしも、男／女というカテゴリーの間にある権力関係を、模倣しているのではなく、恋愛という相互行為における「役割」のカテゴリーを演じる際の、有効な手段、戦術として、「男」、「女」という要素を取り入れているのである。例えば“ボイネコ”という自己規定には外見的な特徴において、“男らしさ”を表象し、性役割においては“女性らしさ”という特徴を持つとされている。つまり、“ボイネコ”は男らしさと女らしさを併せ持つ自己規定であり、そのような自己規定は恋愛という場面において“ギャップ”という有効な戦術として機能し、支持されている。このように、レズビアン・バー「A」で見られた“セク”という概念は、「役割演技」として機能することにより、空間内部における相互行為によって規定される“自己規定”であると言える。

レズビアン・バー「A」という空間、そこで見られる実践の特徴に関して説明してきたが、その

比較として、次にレズビアン・バー「B」における、その空間的特徴や、そこで見られる実践に関して述べていきたいと思う。

4-2. レズビアン・バー「B」

レズビアン・バー「B」は、繁華街とは少し距離を置いた飲食店街にある雑居ビルに店を構えている。レズビアン・バー「A」同様、店の外からは店内を見通すことはできない。店内はカウンターがメインのつくりになっており、店の奥にテーブル席が一つあり、そのテーブルを囲むようにソファが置かれている。店の前に、「GIRLS ONLY」と記されている看板が掲げられている。そこには、離婚・出産経験のあるレズビアン、子持ちのレズビアン、バイセクシュアル、女装し、自身を女性と自認している MtF⁴⁾も参加や共有が可能な空間であることが示されているのだという。そういった空間であることに対し、「もっとガチガチなビアン臭がした方が安心して人はいるかもしれない。」と店のスタッフは言う。ここにおける、「もっとガチガチなビアン臭」というのは、レズビアン・バー「A」で見られた、“セク”のような、特殊な造語・略語を用いて、恋愛関係を構築するという実践のことを指していると考えられる。この語りは、そういった、「レズビアン」の相互行為において用いられる、特殊な造語・略語を、頻繁に使う成員から成る空間を想定している人からすると、コミュニケーションにおける特殊な造語・略語の使用頻度が低い、この空間が望ましく思われないという可能性を示唆するものであると考えられる。ここから、レズビアン・バー「B」では、コミュニケーションにおける特殊な造語・略語の使用頻度が低いいため、レズビアン・バー「A」と比べると、その空間の閉鎖性は低いと考えられる。また、レズビアン・バー「B」における相互行為に関して、次のような語りがあった。「イケてない“フェミニン”より、イケてる“ボーイッシュ”」これは、“セク”によって恋愛関係を規定することに対して懐疑的な態度であり、また、自身のセクシュアリティによって定められる“セク”は、相手との相互行為において、状況的に変化し得ることを示唆している。

また、「20代までは周りに“普通”であることを示そうとしてバリバリの“フェム”、…20歳を過ぎると自由に表現できるようになったから“ボーイ”に、…（“ボーイ”でいることが）しんどくなってきたから、40代に“フェム”に…」という経験的・遡及的な語りは、“セク”というカテゴリーが可変的であることを示している。このようにレズビアン・バー「B」における相互行為においては、レズビアン・バー「A」同様、“セク”というカテゴリーを用いた自己呈示、自己規定を採用していることが明らかとなったが、レズビアン・バー「B」におけるやりとりの中に見られたのは、“セク”というカテゴリーを、状況により、可変的・流動的なものであると捉える態度であった。ここから、レズビアン・バー「B」におけるセクシュアリティの実践において、“セク”による自己規定が変化すること、揺らぐことを認めているという特徴が示される。

4) Male to Female の略。

5. まとめ

これまで、レズビアン・バー「A」、「B」において、その空間的な特徴、相互行為に焦点を当て、記述してきた。ここでは、その両者の差異を、比較しながら、まとめていく。レズビアン・バーという、空間の性質に関する差異として、レズビアン・バー「A」は、“セク”などの隠語を用いたコミュニケーションが頻繁に為され、「秘密結社」的な性質を持つ空間であることを示した。また、レズビアン・バー「B」は、“セク”といった隠語の使用頻度が低く、離婚・出産経験のあるレズビアン、子持ちのレズビアン、バイセクシュアル、女装し、自身を女性と自認している MtF も参加することが可能な空間であることを示した。つまり、レズビアン・バー「B」は、「A」と比べて閉鎖性が低い空間であると言える。また、それぞれのレズビアン・バーにおける、相互行為に見られる差異として、レズビアン・バー「A」では、セクシュアリティによる自己規定である“セク”に沿った「役割演技」という特徴を示した。それに対し、レズビアン・バー「B」においては、“セク”といったカテゴリーを前提とした恋愛関係を懐疑的に捉え、また、その経験的・遡及的な語りから、“セク”というカテゴリーが、流動的・可変的であると捉えられていることが明らかとなった。レズビアン・バー「B」においては、自己規定の間にある揺らぎが、経験的な語りを通じて立ち現れ、それゆえ、“セク”が可変的・流動的であると見なすという特徴が挙げられる。

ここまでの議論をまとめると、レズビアン・バーにおける相互行為に見られる「男／女」の役割分担は、必ずしも、既成の男女間の権力関係である「支配－依存」の関係を模倣しているわけではなく、恋愛関係の構築にあたり、「男／女」という要素を自身の自己規定に取り込むことで、恋愛における有効な戦術として実践されていることを示した。「レズビアン」は、「女」であり、「同性愛者」であるというカテゴリーを併せ持つ存在として、一見、画一的に措定されている。しかし、セクシュアリティという視点から形成された「レズビアン」の自己規定は、用いられるカテゴリーが多様であることから、その自己規定も、画一的なものではなく、多様であるといえる。そして、セクシュアリティという視点から形成される「レズビアン」の自己規定は、必ずしも固定的・不変的なものではなく、可変的・動的な側面を持ちうるといえる。

6. おわりに

本稿の冒頭において、レズビアン・バーにおける「扉」の象徴的な意味に関して考えるところから議論を進めてきたが、ここでもう一度その「扉」の間に立ち返ってみたい。ここに至るまで、レズビアン・バー「A」、「B」の空間的な特徴、相互行為における差異を比較してきたが、①空間の外部に対して一定の閉鎖性を有する空間であるという点、また、②その空間におけるコミュニケーションにおいて、本名や詳しい住所や、社会的な立場などが秘匿されているという点は「A」と「B」に共通していた。この共通点から「扉」の持つ意義について考察していきたい。「A」、「B」は、①②ゆえに家族や友人職場の人々との関係性とは一線を画した空間であり、また、その空間においてのみ、「レズビアン」として振舞うことを可能にしている。すなわち、レズビアン・バーという空間は、その空間内部において成員同士が各々の社会的な属性を積極的に“秘匿”するという

規範のもとで、“カミングアウト”という社会に対し自身のセクシュアリティを公開するという実践から距離を置く空間を形成することができるのだ。従って、社会とは隔絶され、閉ざされた空間をつくりだし、その内部でのみ「レズビアン」として振舞うことが可能となっている。「扉」に隔てられたレズビアン・バーという空間は、あくまでも匿名的な関係性において成り立つ場であり、会員同士が互いの“素性”を詳しく知ることもしなければ、空間の外部においてその会員を特定するような社会的な属性という情報を交換しないため、会員同士が“秘密”を漏洩するリスクを回避しているとも言える。つまり、会員は社会に対して「レズビアン」であることを公開せずして、「レズビアン」であることが可能な空間なのである。

そのような「扉」によって外部の世界との境界をつくりあげ、その内部において“「レズビアン」である”ことを実践することが可能であるレズビアン・バーという空間においては、“セク”と呼ばれる特殊な造語に沿った「レズビアン」としての多様な自己規定の在り方が実践され、また、その“セク”に沿った自己規定は、レズビアン・バー「B」において実践されていたように、可変性という性質を持ちうるということが示された。このように、レズビアン・バーという「扉」で仕切られた空間の内部では、“セク”という自己規定の概念によって、多様で可変的なセクシュアリティが実践されていると言えるであろう。

謝辞

本稿は、関西学院大学先端社会研究所 2013 年度リサーチコンペの研究助成を受けて実施した調査成果の一部です。また、調査に際して協力を頂いたレズビアン・バーで出会った皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

参考文献

- P. L. バーガー, 1979, 水野節夫・村山研一訳, 『社会学への招待』思索社.
- J. イーディー編, 2006, 金城克哉訳, 『セクシュアリティ基本用語事典』明石書店.
- L. フェダマン, 1996, 富岡明美, 原美奈子訳, 『レズビ안의歴史』筑摩書房.
- 伏見憲明, 1997, 『〈性〉のミステリー越境する心とからだ』講談社.
- S. フロイト, 2007, 中山元訳, 『幻想の未来／文化への不満』光文社古典新訳文庫.
- E. ゴッフマン, 1974, 石黒毅訳, 『行為と演技：日常生活における自己呈示』誠信書房.
- G. ハート, 2002, 黒柳俊恭, 塩野美奈訳, 『同性愛のカルチャー研究』現代書館.
- 堀江有里, 2004, 「レズビ안의不可視性 日本基督教団を事例として」『解放社会学研究』18: 039-060.
- G. ジンメル, 1979, 居安正訳, 『秘密の社会学』世界思想社.
- 菅野仁, 2003, 『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会.

Variety and Fluidity of Sexuality :
Lesbian bars in Osaka Area

ODANI, Motoko
(Kwansei Gakuin University)

Abstract

This research is about sexuality ; its main focus is how lesbians define themselves as “lesbians” in contemporary Japan. In the field of sociology, the word of “lesbian” has been explained by two notions ; “woman” and “homosexual”. Moreover, in the area of gender studies, it is often said that lesbians are “invisible”, in other words they are unrecognized existences compared to gay people. Since, there are a lot of lesbian studies such as researches of the lesbian feminism or movements which aim to struggle the “invisibility” of lesbians. However, few studies have been argued the self-perception of lesbians, especially based on their sexualities. I have researched lesbian bars in Osaka. In these lesbian bars, they use the unique word “*seku*” and they use the word to express their sexuality. In this paper, it is the aim to explain how lesbians represent themselves based on sexuality’s perspective and to describe variety and fluidity of sexuality.

Key words : sexuality, self-perception, lesbian